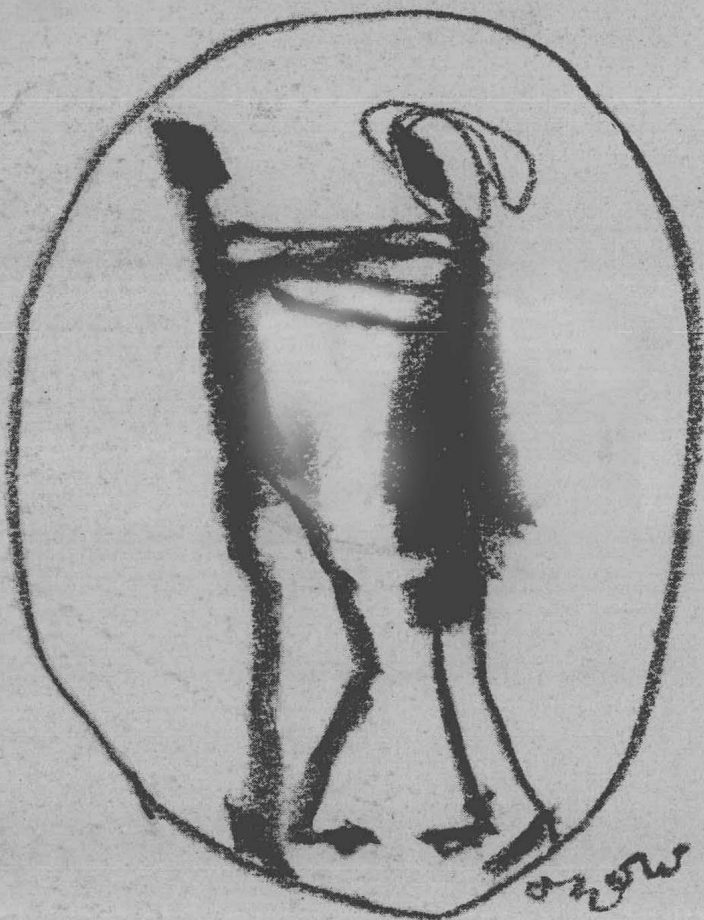


草いきれ

河野多恵子

草いきれ

河野多恵子



文藝春秋

草 い き れ

昭和四十四年十二月二十日 第二刷

定価六〇〇円

著 者 河野多恵子

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

102 東京都千代田区紀尾井町三
〒電話二六五―二二二一(代表)

印刷 大日本印刷
製本 中島製本
製函 小野部製函

※万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

草

い

き

れ

序

彼女は、かねて日記を書く習慣をもっていた。感情の一部に精神というものが生じはじめる時期、その新しい不思議な気持が彼女に日記を書くことを要求したのに始まって、それはもう二十数年間続いている。

残ってはいないが、彼女の最も早い時期の日記は非常に規則正しいものだった。一日の省略もなかった。未熟だった彼女は、日記というものは毎日の分量をほぼ同じにするものだと思っていたし、特にたつぷり書きたいような事態や思いにも出会わなかったのだ、一斉に同じ程度の短さで揃って書いた。そうして、そこに見られる、ささやかな外的、内的の経験は、皆ありのままの事であった。多少の歪曲はまぬがれなかったかもしれないが、彼女自身の感じの上では、すべて本当の事だったのだ。そうあるのが日記だと、彼女が務めたわけではなかった。本当の事を書く以外に、彼女は日記の書き方も、書く必要もまだ知らなかったに違いない。

そういう時期が可成り永く続いた後で、彼女の日記には時折誇張が加わるようになってきた。

最初は知らないうちに、やがては紛れもなく彼女の意識に基づいて——。同時に、当日のひどく切

実な事柄を切実であるために弱めるなり、省くなりして隠蔽せずにはいられなくなることもあった。或いは又、彼女は今もってそうなのだが、日によって長短のむらが著しかったり、何も書かなかったりする——つまり、書きたい日だけに書きたい分だけ書く習慣もその頃から始まりだしたのであった。

もっとも、当時の彼女が日記で弄した、誇張や隠蔽は、当日の日記の長さや空白とは何の関係もないのであった。彼女は屢々、ありのままに書くよりもずっと簡潔な書き方で、誇張に成功したからである。或いは、隠蔽によって埋没させた、事柄や切実感に申しわけするかのようになり、同じ日のありきなどの出来事や、さりげない気持を丹念に、長々と書き記す場合があったからである。

誇張の魅力は、打ち勝ちがたいものであった。彼女は誇張を揮うに適した箇所を発見した時には、既にそちらへ踏み込んでいるのだった。今書いていることがありのままではないという気がかり——その強く自分を緊めつけてくる、恐ろしいような、恥ずかしいような気がかりを精いっぱい押し返しつつ、そこに勝利の杭を打ち並べていく張り合いは、それまで如何なる場合にも全く経験したことのない歓びを彼女に覚えさせた。誇張の表現が簡潔で鋭くあればあるほど、彼女は勝利の杭を確実に打ち込んだという手応えを感じた。そうして、その手応えは、簡潔で鋭い、誇張の表現の文字をしつかりと書きつける肉体的な手応えに直結するので、そんなときの彼女の歓びは、官能的な快さをも孕むのだった。

彼女が日記で隠蔽するとき、誇張の場合に覚える恐ろしいような、恥ずかしいような気がかりは伴わなかった。同じ隠蔽でも、全部を省略するのではなくて、一部を省略したり、全体的に内輪に書き

たりすることは、消極的な誇張に当たる。が、そんなとき、彼女には誇張の意識はまるでなかったものだった。彼女の意識は、自分が一部を省略し、或いは内輪に書いたがために減じた部分と程度のみに向けられ、事実の全体的な変じ方には気づかずに行ったのだろう。

そうして、いずれの場合でも、彼女が誇張のときのような気がかりを感じなかったのは、隠蔽せずにはいられない、恐ろしい、恥ずかしい、大きな気がかりが事前にあるがために、隠蔽する気がかりのほうは気圧されてしまうからなのだろうか。それに、彼女はその全部を、または部分的に、或いは程度的に隠蔽すると、自分をいたたまれなくしていたものたちが、単に日記の上ばかりでなく、気持ちの上からも埋葬されてしまうのだった。彼女は胸が軽くなる。すると、同じその日にあった、ありきなどの出来事やさりげない感想が如何にも気がおけなく思われ、つい暢気にそれらと付き合いたくなくなることがよくあった。

本当ならば、埋葬されたものたちがそこに生きる筈だった、日記の頁に、彼女は平素の日記では黙殺するような、些細なことを詳細に書き綴った。彼女は楽しかった。埋葬したあとの土を踏み固めているような気持がどこかにあったが、それさえ寧ろ得意に感じられ、彼女は快活に土を踏み続けた。

そんなふうに、当時の彼女は、日記の中で誇張や隠蔽をすることはあっても、積極的な偽りを書き込んだことはまだなかった。偽りを恥ずべきことだと思っただけではない、誇張や隠蔽の場合には、彼女は激しい要求を感じたし、窮屈さの中でそれを果たすことにやり甲斐を感じた。が、彼女は全く架空のことを書かねばならない要求は感じなかったし、その窮屈さの伴わないらしい方法に、何か魅力があろうとは、ちよつと考えられなかったからである。

そういう時期がやはり永いあいだ続いたあとで、彼女は一時、誇張や隠蔽のない日記を再び書くようになっていた。

今度の彼女は、日記を書きはじめて最初の時期のように、自然に正直な日記を書いたのではなかった。ありのままの自分の姿を記すのでなければ日記を書く意義はないと、至極平凡な——だが、既に誇張や隠蔽の味を知り、それあってこそ日記を書く甲斐があるかのように感じ馴れてきた彼女としては眼の覚める思いをしたほどの考えに突然捉えられ、その意識のもとに書くようになったのだった。

彼女は、誇張の誘惑と闘った。救いや思いのほかに結構な後味を備えて、やさしく自分を待ち受けてくれている、隠蔽というものをも、全身で力むような思いをして裏切った。が、実行してみると、正直な日記を書くということは、やはりいいものだった。そのストイックな日記の書き方は、苦しく、淋しい中にも、彼女に新しく別の張り合いを感じさせた。日記の中に積み重ねられて行く自分の姿が、ありのままであるということは、平穩で確かな強みを彼女に与えもした。

いつの間にか、彼女は誇張や隠蔽に未練を感じなくなつた。日記を書きはじめて頃に似て、彼女は殆ど自然に正直な日記を書くようになった。そうして、更に、彼女はありのままの自分を書き記すことに、積極的な歓びを感じるようになったのである。

彼女は、付き合ひの始まつた異性とのかつての丹念に、ありのままに日記に書き込むようになった。現実生活で夥しい歓びを感じていたので、彼女はそれを日記に記すとき、良くも悪くも誇張する必要はなかつたのである。勿論、彼とのことで、隠したいことなど、何もなかつた。偶々、他のことで、

何か書きにくいようなことを経験しても、女として——結局は人間としての自信を持ちはじめていた彼女は、それを客観的に見直すだけの余裕をもつことができ、正直な日記を書き続けているという自信と相俟って、少しばかりの努力で、それも亦ありのままに記すことが出来るのだった。

その異性との付き合いが深まるにつれて、彼女は時には我を忘れ、時には人間というものものの不思議さに感じ入った。それを日記に書きながら、彼女は自分は今こそ、ありのままに書き記すに足りることを経験しているのだという気がした。そうして、彼女は思った。ありのままに書きたくなるのが、日記というものだったのだ。

今更ながら、彼女は、ありのままの自分の姿を記すのでなければ日記を書く意義はないなどと、鹿爪らしく考えねばならなかった頃の自分を憐んだ。そうだったのだ、あの頃の自分が日記の中で弄した誇張や隠蔽は、それらの手段を覚えはじめた頃の新鮮さは疾づくに失っていたのだった。そうして、自分自身の生活からも、新鮮さは絶えていたのだ。彼女は、既に多少のことでは新鮮な興味を覚えぬ年齢に達していた。そうして、そんな彼女に新鮮さを感じさせるに足りる、出来事は起こりかけては消えていった。彼女は、自信を失った。不愉快な出来事は些細なことでも、のたうち廻るほどにこたえた。彼女はそれを次々と隠蔽して行った。或る程度には、書き記すことはあっても、それがそれほどこたえたのは、自信のなさのせいであり、しかもその出来事のためにまた一段と自信を失ったことなど、そうと感じておりながら、決して書かなかった。そうして、ときたま新鮮な出来事であると判じ得る条件をそなえた出来事にめぐり会うと、そうではない条件もまた多分に備わっていることには目をそむけ、希望的に誇張せずにはいられなかった。

彼女は、あの頃の自分が正直な日記を書くことにしたのは、一種の退却だったのだと思った。妻に對してつらい見栄を張り続けてきた哀れな夫が、もう何も彼も打ち明けようと決心したようなものなのだろう。で、あの頃の自分が正直な日記を書きながら感じたのは、張り合いではなくて慰めであり、日記の中に積み重ねられて行く自分の姿があのままであるという自信は、あの頃の自分の唯一の自信だったかもしれないのであると、彼女は顧みた。

そのように、彼女は一時期の自分を輕蔑的に憐み、同じ正直な日記でも、当時と今とでは、内容については勿論のこと、それを書かせているものが如何に異っているかということを思い、自足の氣持を味わった。——という意味のことを、彼女は日記に書いた覚えがある。その後、突然その自ら讃えるほどの正直な日記に、歴然とした偽りが混じるようになっては、彼女は想いもしなかったのだ。

当時の彼女はストイックではなく、ありのままの自分の姿を書くことが欲ばしくて正直な日記を書いていた筈だった。が、日記で正直さを保ち続けるといふことは、結局不自然なことなのだろうか。或いは、彼女にとって、または彼女に次に訪れた時期にとって、不自然なことだったのだろうか。

彼女の日記に時偶挿入されるようになった偽りは、その異性とのことについての希望的な事柄に限られていた。彼女は幸福感のあまり、そんな偽りを記してしまうのだった。そうして、最初のうち、その希望的な偽りはやがて必ず現実となつてあらわれた。そうなるように、自身が仕向けている氣味がないでもなかった。が、彼女はそういう吟味をすることさえ思いつかないほどの息災ぶりだったものである。

日記の中の希望的な偽りが重ね重ね実現するのを見ると、偽りとはいふものの、もともとあまりの幸福感から、ついそれを書いてしまふに過ぎない彼女は、偽りを書き、書こうとしている感じを一層もたなくなつた。彼女は幸福な自分たちのために、更に願ひ、縁起をつけ、明日を予言しているような気がしはじめてきた。そうして、その縁起のいい予言が必ず的中するので、彼女は希望的な偽りを書きながら、手廻しよく未来の日記を書いていゝように感じることさえあつた。

ところが、彼女のそんな予言はやがて外れはじめてきたのだつた。裏目ばかりが出る。彼女は積極的に縁起をつけようとした。日記に書きつける希望的な偽りは数を増し、露骨になつた。彼女は最早それを幸福感によつてではなく、心細さによつて書かせられ、自分たちのためにではなく、自分のために書くようになっていた。

一体、彼女は今でもそうであるが、日記を書きだした最初から、盗見される懸念を感じたことはなかつた。日記を書きはじめてたくなるような気持の蠢動自体が、既に羞恥を感じさせる性質のものであり、実際に日記を書いたという事で、それは二重の羞恥となる筈だつた。正直な日記であらうと、不正直な日記であらうと、人には読まれたくはない。盗見される懸念は当然生じる筈なのだが、彼女が別段その意識をもたなかつたのは、恐らく環境のせいらしかつた。

彼女の家族は、単純で、穩健な人間ばかりだつた。日常の言行に現われるもの以外の何かを潜めていそうな者はひとりもいなかった。ということは、他の者に対して、何かを潜めているのではないかなどと決して思つたことのなさそうな人間ばかりだつたということだ。日記というものは、皆の前で行つたり言つたり、見聞きしたことを単に書き留めておくものだと思つてゐるに違ひない。わざわざ、

読んだりはいしないだろう。實際また、彼女は自分のそんな考えが迂闊だったと後悔しなければならぬような羽目も見なかったのである。彼女は、日記について、一層家族を意識しなくなった。家族が家族であるだけに、彼女は日記を書いていることを強いて隠しはしなかったから、そのことは自然に知れていたが、目上の家族は、「規則正しい習慣を身につけるくらいの役には立つかもしれない」というような、肯定的で、健康な、黙殺ぶりを見せた。そうして、その後、年月を経ても、彼女の日記を書くことが家族の関心を引くことは決してなかったのである。寧ろ、忘れ去られたのであろう。

家族を離れて、自分ひとりの生活に入ってから彼女は、勿論日記の盗見を懸念する必要は全くなかった。また偶に、逗留する客があつても、懸念しないことが習慣となつてゐる彼女は、手近なところにおいてある日記を客に警戒することなど、思いもしなかったのである。

何年か経つて、彼女がその異性と知り合い、深く付き合うようになると、盗見され得る機会は幾らもあつた。彼女は、そのことに気がついた。が、彼女はやはり、懸念はしなかった。今度は永い間の習慣のせいではなかった。ありのままに書かれておりながら、彼と自分とのことについての欲びに満ち溢れた、現在の日記のことを考えると、読んでもらつてもいい、と彼女は思つたのである。日記の中に希望的な偽りが混じるようになってからも、それが予言としての的中している間はやはりそうであつた。

その間、彼が日記を読んだ気配は、彼女は一度も感じたことはなかった。彼女は彼が一層慕われ、余計に読んでもらつてもいいと思つた。

ところが、日記の中の希望的な偽りが予言としての中せず、単なる偽りとして再三取り残されてゆ

くようになって、それがやめられないばかりか一層頻繁に偽りはじめると、彼女が自分の日記を彼に読まれることを積極的に期待して書くようになるまで、さして間はなかったのである。

彼女の偽りは、希望的なものばかりではなくなった。彼女は誇張や隠蔽とふたび縁深くなったが、偽りと共に、それを以前の一時期とは全く違って、多彩に利用した。日記の中で、彼女は彼を信じているふりをし、彼に媚び、彼が自分と同じ夢に繋がってくれるように仕組むのだった。

しかし、現実の彼は、彼女の日記の中の彼とは一層かけ離れて行った。彼女は偽りや誇張や隠蔽を更に夥しく活用した日記を書かずにはいられなかった。全く不正直な、激しい書き方で、彼を非難し、彼に取り縋り、強がり、訴え、媚びた。

相変らず、彼には彼女の日記を読んだ様子は見られなかった。彼女は彼に、読みたくないかと訊き、読んでほしいと願い、読むようにと迫った。そのたびに、彼は辞退した。以前、彼女の日記を決して盗見しなかった頃のように、節度のためではないことは、彼女にはよく判った。彼は最早、彼女に関わりたくないのである。

それでも、彼女は衝動的に、或いは計画的に不正直で激しい日記を書き続けた。衝動が極まった異常な冷静さの中で、最初から計画的であったよりも一層計画的に偽りや誇張や隠蔽の効果を計ることもあった。

しかし、彼は一度も彼女の日記など読むことなく、ある日突然、彼女の目の前で立ち去った。賢明だったのであろう。

その時期の彼女の日記には、「私は捨てられるのだろうか」「私は捨てられそうな気がする」「彼

は去った」という彼女にとって最も切実だった筈の気持や出来事は最後まで一言も記されてはいない。不正直で、激しい、乱れた言葉が続き、彼の去った二日前の日記を最後に突然終っているのである。現在、残っている彼女の日記は、この時期の最後の三分の一ほどに当たる部分以後のものである。

それ以前、彼女は使い終えた日記帳は、二、三年も経つと、捨てたくなったものだった。何かの機会に読み返して見ると、過去の自分には疎ましさを感じない場合でも、そういう日記を書いたという自分に対してだけは、どうしても我慢がならない。と、その日記帳が手許にあることが気になって、破棄せずにはいられなくなるのだった。

工まぬ正直さで、無心に書かれた、初期の日記でさえそうであった。当時の彼女は薄いノートに日記を書きつけていたが、彼女はそれを数冊ずつ捨てた。破棄した最初の頃には、彼女は引き続き、正直な、無心な日記を書いていては筈なのだが、さほど遠い過去の自分が書いたのでもない、その以前の日記に、胸苦しい嫌悪を感じたことを覚えている。その正直な、無心な書き方が、未熟であるだけに、却って厚顔ましくてやりきれなかったものだ。

彼女が過去の日記を捨てたくなるのは、仔細こそ異っていても、いつも嫌悪と侮蔑のためであった。破棄した日記が準っていた歳月は、十数年に及ぶ。

その間、幾度過去の日記を捨てても彼女が日記を書く氣を失くさなかったのは、この日記も捨てるであろうと思ったことが一度もなかったためらしい。現在書いている日記こそは後々までも決して疎ましくなることはあるまい、いつまでも保存するに違いあるまいなどと、特に意識こそしなかったが、

彼女は当座の日記には常に得心しているらしいのだ。で、彼女は、日記帳を使い切るなり捨てたという経験だけはないのだった。ある期間は、必ず残っているのである。

彼女の最後に捨てられた日記は、どのくらいにあいだ残っていたのだろうか。もう忘れてしまったけれど、それを読み返した記憶はある。——彼はもういなかった。そうして、その日記に嫌悪と侮蔑を感じることさえ、まだ出来なかったほど、月日の経っていない時分のことだったようだ。

彼女は疾うから、一日毎の区切りのない、製本仕立ての日記帳を暦年には無関係に通して用いていた。最後に捨てた、その日記帳の始めのあたりには、どのようなことが書かれていたか、彼の名はもう見られるようになっていたかどうか。また、その異性のことで歎びに充ちていた日々をありのままに気負い立って書き綴った覚えはあるが、その部分を読み返したという印象はない。ただ、彼とのことについての希望的な偽りが混じりはじめ、それが予言のように的中していた頃の日記や、偽りが偽りとして、いつまでも置いてけぼりを喰うようになった頃の日記や、誇張や隠蔽をも活用しはじめるようになった頃の日記——そのあたりの日記を読み返したときの印象ばかりが強いのである。

偽りが予言的だった時分、彼女は例えば、自分たちはこういうようにすることに決めた、と偽りの記述をする、やがて現実になんか決めた時には何も書かない。そうして、決めたところに従って行動したことが、後日の日記に現われている。序に、決める話が実際になされたときの自分たちの言行が書き添えられてあることもあった。が、彼女は別段、緻密な配慮によって、そんな書き方をしたわけではない。もとより、予言性の墜ちた、数々の偽りの後始末など、なされている筈はなかった。他人がそれを読んでさえ、矛盾に気づいたことであろう。また、如何に誇張や隠蔽がなされていても、

それに続く部分の日記と読み較べてみれば、その雰囲気の不自然な変り方の裡に現実の変化を嗅ぎ取ったことであろう。

まして、書いてから日の浅い日記を、当人の彼女が読み返すのである。予言的だった偽りも、予言性の壁ちた偽りも、誇張も、隠蔽も、どれひとつとして、背後にあった自分と彼の本当の姿を突きつけてこない文字はない。彼女は太い溜息の洩れたはずみに、未練と恥に癒った顔の動きかねるのを感じたことを覚えている。しかも、彼女に未練と恥を感じさせてやまないのは、自分と彼の本当の姿ばかりではなかった。日記に拵え描かれている自分と彼とが際限なく未練をそそり、それを拵え描いた浅ましさが一層恥を鋭くする。それにつけても、未練の切実さのほうに恥の痛みよりも、更に強かったのだろう。彼女はその日記を破棄する決心がつかなかった。その後、それを幾度も読み返した記憶は、彼女にはないけれども……。そうして、その日記帳は、疾うから見当らなくなってしまった。いつ頃、どういう気持で、どのような仕方であつたのだろうか。これも彼女は思いだせない。

彼女の残っている日記帳の最初の一冊は、その異性ととの世界が急速に崩れてゆく日々から書き始められている。以後、二年数カ月月のことが含まれているのだが、この一冊の日記は美しい。

彼女が怖れや屈辱や怒りや執心の中で書き記した、偽りや誇張や隠蔽は乱れ切っていて、醜態をさらけだしている。恐らく、捨てられた最後の日記の終りの部分以上なのではあるまいか。そうして、ありのままの姿で現われている彼女はまた、眼をそむけたいほどに見苦しく、悲惨である。が、彼女の日記は白熱している。彼女の予期しなかった真実を勝ち得ている。その見にくさは、爽快である。それが絶頂に達して、突然止む。